言葉と文字の教育によって知能は向上

人間は、言葉をもつことによって、人間になりえた、ということは真実でしょう。しかし、人間は、音声言語から、視覚言語、つまり文字をもつことによって、急速に文化を発展させることができました。

すぐに消えてしまい、近くにしか伝わらない“音声言語”に比べ、いつまでも保存でき、世界のどこにでも伝えられる“視覚言語”のおかげで、私たちは、いかなる国の、いつの時代の偉人の思想をも受け入れることができるようになりました。

この“言葉”と“文字”の働きとその価値とを、私たちは正当に評価しなくてはなりません。私たちは、あまりにもその恩恵になれてしまって（たとえば“空気”のように）、その価値を忘れてしまっているように思われます。

私たちは、空気や水の価値を、金やダイヤモンド以下と考え誤ってはなりません。

「小学校に就学してしまった六歳以降の子供たちの知能は、ほとんど固定してしまって、動かすことができない。就学以前なら、子供の知能を引き上げることができる。言葉と文字の教育によって。」

これは、「リーダーズ･ダイジェスト」昭和 44 年 2 月号の特別記事として、世間の反響を呼んだものです。もっとも、ここでは、文字という代わりに、“読書への準備”という表現を使っていました。就学前の幼児としては、“読書”そのものは無理であり、その準備としての“文字教育”は、その目的が、文字そのものではなくて、読書にあるのですから、ここでは、“文字教育”よりも“読書への準備”のほうが適切な表現だと思います。

確かに文字の価値は、個々の文字そのものにあるのではなくて、それが“偉人の思想”を表現し、それを人に伝える点にあります。とはいえ、文字と思想との関係は、肉体と精神との関係に似ていて、私たちは、思想を尊重するがゆえに、文字の価値をも認めなければなりません。